

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：25405

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884041

研究課題名(和文) 日本語指示詞の運用を中心とした歴史的变化に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Historical Changes in the Usage of Japanese Demonstratives

## 研究代表者

藤本 真理子 (Fujimoto, Mariko)

尾道市立大学・芸術文化学部・講師

研究者番号：10736276

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、談話内における指示詞運用の歴史的变化を対象としている。知識の導入先の切り替えをいかなるタイミングで行うかという心的処理の考えを、古典語の指示詞研究に取り入れて考察を行った。この歴史的变化には、聞き手への配慮の言語化という中世後期に生じた日本語表現全般の変化があるという点についても述べた。

(1) 記憶を指示するような非直示用法において、ソ系列の指示詞とア系列の指示詞が使い分けられる要因を示した。(2) 指示語と不定語との類似点、相違点に着目し、指示詞ソの指示方策に関して、空欄性という点から考察を行った。これに合わせて、中世期の抄物に関して、指示語と不定語の用例を一部データ化した。

研究成果の概要(英文)： This research deals with the historical changes in the use of demonstratives in conversation. I examine this aspect by analyzing the idea of mental processes involved in choosing the timing for switching demonstratives for introducing new information in the case of classical Japanese. By doing this, the verbalization of the underlying "Politeness towards the hearer" can be pointed out as one of the historical changes that occurred in the Japanese language in the late Middle Ages.

(1) I show the main factor behind the differences between So-demonstratives and A-demonstratives in non-deictic use. (2) Focusing on the similarities and differences between demonstratives and interrogatives, I examine the strategy of So-demonstratives from the point of view of the so-called property of "blank"; I also compiled a database containing examples of demonstratives and interrogatives in the "Shomono" written in the Middle Ages.

研究分野：日本語学

キーワード：指示詞 古典語 文法

1. 研究開始当初の背景

古典語の指示詞研究はこれまで古典テキストの解釈の中で行われることが多く、理論的アプローチの確立には至っていない。近年、現代語研究での成果や枠組みを、古典語も射程に入れて検討し直そうとする動きが盛んである。指示詞研究においても、岡崎(2010)が指示副詞を中心に、古典語から現代語への歴史的变化、中でも直示用法(例：目の前に本がある。「この本は今日買いました。」)の変化の大きな道筋を示した。指示詞の研究では、これまで内省がきかないため、用例をあげるに終始していた古典語の文脈指示(例：「太郎という人がいて、その人は学生です。」)や観念指示(例：「あの記事はもう読みましたか。」)についても理論的アプローチのできる環境が整いつつある。

申請者はこれまで、日本語指示詞の歴史的变化に関して、指示詞ソと聞き手への配慮との関連を中心に研究を進めてきた。その手法として、曖昧な判断や直感的解釈を避けるため、収集したデータの分類基準の明示化を行い、また、現代語や方言、諸外国語の研究されている理論的枠組みも作業仮説として、積極的に用いる姿勢をとっている。この手法により、指示詞ソが聞き手領域と結びつく経緯を明らかにし、さらに指示詞アの古代語で特殊と考えられていた例についても、アの運用そのものから説明可能であることを指摘した。

2. 研究の目的

本研究は、談話内における指示詞運用の変化について、知識の導入先の切り替えをいかなるタイミングで行うかという心的処理(認知面、談話管理理論)を古典語の指示詞研究に持ち込むことにより、研究する。また、この変化の背景には、聞き手への配慮の言語化という中世後期に生じた日本語表現全般の変化があるという点についても明らかにする。

本研究では研究期間を2年に定め、その中で、申請者がこれまでも取り組んできた古典テキストにおける指示詞の運用に着目し、これまでに歴史的变化を通しての研究の進捗が少ない観念指示用法、文脈指示用法について変化の様相を明らかにする。聞き手への配慮など、使用場面の分析まで含めた、実証的に指示詞に取り組む研究は、未だ十分ではなく、これまでに提案された指示詞の歴史的变化に関する仮説の検討および修正を進めることも目的とする。

(1) 指示詞の運用

観念指示の歴史的变化

中古和文資料においては、指示詞力(ア)には現代語であれば指示詞のソが担う、話し手にとってまだ知らない情報を指す用法がある(『源氏物語』の例：[右近からある人の存在を初めて聞いた談話の中で](源氏 右近)「さらば、かの人、このわたりに渡いたてまつらん。」【現代語訳：では、{その/??

あの}人をこの屋敷にお迎え申そう。】)。現代語では、聞き手によって導入された情報は同一談話内では新規の情報であることを明示しつづける必要があり、アではなく、ソが用いられる。しかし、中古から中世にかけては、上のような例がまとまった数見られる。申請者はこれらが話し手の願望を表す文に多く現れること、また同一談話という談話の区切りが古典語と現代語とで異なる可能性もあるという予測のもと、堤良一(2012)(『現代日本語指示詞の総合的研究』、ココ出版)で取り込まれている世界知識と言語化という観点も踏まえ、指示詞の運用の中でも、力(ア)とソの指示詞の観念指示の用法を明らかにする。

文脈指示の歴史的变化

中古和文資料には、指示詞の文脈指示の用法において、現代語ではソが用いられると考えられる箇所にはアの前身である力という指示詞が用いられることがある。これらについては個別的事例として古典作品の分析などでは触れられることはあっても、指示詞全体の運用の考察においては、例外のように扱われてきた。しかし現代語の用法から見れば例外的用法であっても、これらの例が許容されていたという運用の実態を示す必要がある。申請者は、文脈指示としての振る舞いを見せる指示詞力との違いを明らかにするため、中古から中世、近世にかけての指示詞ソの文脈における指示の様相を明らかにする。

(2) 文脈指示の再検討

文脈指示は、日本語母語話者においても個人レベルで異なる様相を示す。それが、テキストの結束性によるものであることは、庵(2007)などで指摘されてきた。また、世界をどのように言語化するかはそれぞれの言語によって異なり、巴雅尔都楞(2013)(『モンゴル語の ene について 日本語のアノとの対照』、日本言語学会)では、モンゴル語においても主に文脈を指す指示詞があることが報告されている。

申請者は、(1)で取り組む、指示詞の運用の歴史的变化に関する成果により、通時・共時の双方向から、文脈指示に見られるテキストの結束性を明らかにする。現代語および方言、他言語の対照も含めた歴史的变化の考察を目的とする。

(3) 本研究の独創的な点は、これまで古典解釈ならばテキスト内での用いられ方に焦点があてられ、古典語のデータとして扱う場合ならば数の大小に焦点のあてられることの多かった、古典語指示詞の研究において、その両側面から資料とデータを扱おうとする点である。また、現代語や方言、諸外国語において研究されている理論的枠組みも取り入れて分析を行い、指示詞の運用の歴史的变化に総合的な視点をもたらそうとしている。また、談話における話し手の知識の取り入れ方や配慮がどのように言語化されるかという発話行為に関する点は、指示詞のみならず、

敬語や終助詞などの言語事象においても広く関心がもたれている。本研究で明らかにする聞き手配慮の言語化が言語変化に与える影響は、これらの文法事項の研究に対しても成果を提供し、研究の進展に貢献するものである。

### 3. 研究の方法

平成26年度・27年度を通して、(1)指示詞の運用（観念指示の歴史的变化、文脈指示の歴史的变化）と(2)文脈指示の再検討について、以下の方法で取り組んだ。

#### (1) 指示詞の運用

観念指示の歴史的变化：運用と心的処理

中古和文資料の調査に加え、中世、近世、明治期までを視野に入れて文献に見られる観念指示の用法を整理する。

文脈指示の歴史的变化：古典語（中古～近世）

コーパスによる予備調査：文脈指示は資料において最も多くの例が確認できるものである。そのため、国立国語研究所において公開されている中古和文資料のコーパスを用いて調査を行う。また中世、近世の文献資料も対象に調査を行う。

指示詞のデータベースの構築を検討を行う。コーパスの利用と合わせて、中古、中世、近世、近代、また上代も含めた日本語文献における指示詞のデータベース構築の方法を検討する。日本語教育や心理学、また現代日本語においても研究される指示詞について、これらの古典語資料におけるデータを広く提供するために既存のコーパスへの検討も行う。

#### (2) 文脈指示の再検討

現代日本語を中心とした文脈指示のデータの収集と整理、さらに収集したデータの分析を行う。

また研究協力者である松本朋子氏（京都府立大学非常勤講師）とともに、研究会で検討を行う。その他、巴雅尔都楞（大阪大学大学院）を含め、日本語指示詞と諸外国語の指示詞との対照、および指示詞と比較的近いところに位置づけられる疑問詞との関連性について考察する。

研究会での議論を通して、コミュニケーションにおいて、相手の発話や外界の対象をどのように知識に導入するかという点を通時的、共時的に検討する。

### 4. 研究成果

本研究では、以下の(1)～(4)の成果を得た。

#### (1) 指示詞の運用

談話内における指示詞運用の変化について、知識の導入先の切り替えをいかなるタイミングで行うかという心的処理（認知面、談話管理理論）を古典語の指示詞研究に持ち込み、考察を行った。

中世から中古にかけての観念指示の歴史的变化について考察を行った、その結果、直

接経験的な知識と間接経験的な知識という知識の区別について、古典語においても、言語的文脈によってのみ形成された要素（間接的知識、例）〔女 召使〕「もし、人來とも、その文取り入るな」(『平中物語』)に関してはソのみが選択されるといったことから、ソとアの区別があったことは認められる。しかしながら、中古語の例（〔正頼 大宮〕「遊びたるさまも、さらにこと人に似るべうもあらず。いかで聞こし召させむ」とのたまへば、宮、「いかでかれ聞かむ。【仲忠の琴がすばらしいという話を聞き、「どうかして{それ/?あれ}(仲忠の琴の音)を聞きたい)】」(『うつほ物語』)から、現代語とは異なるタイミングにおいて、間接経験的な知識から直接経験的な知識として指し示すことのできる対象に移行することが確認された。これは、中古語の力（ア）系列と現代語のア系列には直接経験的な知識として扱える範囲に違いがあったということになる。古典語では、対象の導入が談話以前か否か、また相手が新規に導入した要素であるか否かということよりも、その対象が現実世界に存在するということ、話し手が認めたということが直接的知識への導入における要因として強く働いていると見ることができる。それに対して、ソ系列には仮定の例が見られることから、ソ系列は現実世界における存在や話し手の直接経験とは関係なく、言語的文脈によってのみ形成された対象の指示が可能であると言える。

現代語のア系列では不適切と判断される例で、中古語の力（ア）系列が指示できるものを見ると、何でもって直接的知識に導入するかという決定要因に、聞き手との関係性が含まれておらず、談話の中心的テーマである点や興味・関心の対象であるという点が優先される。つまり、同一談話内で聞き手によって新規に導入された要素は、現代語の場合、聞き手との知識の対立を明示するという聞き手への配慮から、間接的知識として処理されると考えられる。

中世の聞き手領域に関わる対象の指示について、対象に関する情報の面から整理を行った。その結果、中古からソ系列と結びつきはじめた聞き手領域の指示において、ソ系列の指示詞が聞き手領域指示の用法を確立したと述べるためには、ア系列の指示詞が聞き手および聞き手の近くにあるものを指せなくなる、すなわちア系列が聞き手領域に関わる指示から排除されている必要があった。しかしながら、中世はソ系列・ア系列の聞き手領域に関わる指示での併存状態が続く。しかしこの併存状態は、対象に関する情報という点に着目することにより、整理できる。中世後期頃までは、対象そのものの情報の有無によって、ア系列かソ系列かの指示詞が選択され、情報が完全でない未知の対象を指し示す場合はア系列が選ばれ、対象の情報が一部ある場合、過渡期として両者が併

用され、対象が既知である場合の指示は、ソ系列が担う。これはまたソ系列が聞き手領域指示を獲得する過程とも考えられる。このほか、「あれはいかに」や謡曲に見られる呼びかけの「あれなる」など、一部表現は、感動詞的に用いられるようになったため、長らくア系列指示詞が聞き手領域に関わる指示に残ることを指摘した。

### (2) 文脈指示の歴史的变化

中古から近世にかけて、ソ系列指示詞の文脈指示用法の歴史的变化を考察した。その結果、指示詞ソの中でも、場所指示の「そこ」という語形が、上代、中古、中世を通して、文脈を切り取って提示するという働きから、話の場にいる聞き手という存在に依存した指示をも行うようになる様相を捉えた。

また同じ「ソコ」という語形でも、資料ごとに現れる用法に偏りが見られ、先行文脈から導き出せる場所を指示する例が多数ある『天草版平家物語』のような資料もあれば、先行文脈の内容そのものを受け文脈指示としての働きが多く確認できる講義録などの資料があることが確認できた。同じ形式ではあるが、資料によって指示対象の範囲に傾向が見られることが指摘できる。

この資料性に加え、「ソコ」というコ形について、「ソコココ」など複合語において見られる意味役割の検討や、コ形に対してレ形など他の後部要素を伴う語形との比較が課題となる。これらを含めて、非直示の用法において、ソ系列がどのように意味変化をするのかの検討が必要である。

### (3) 文脈指示の再検討

観念指示については、上代から中古にかけてア系列へと働きが移ったと見られる一方で、不定語への変化についてはいつごろ、どのように変化したかの検討は十分にはなされてこなかった。本発表では、中古・中世のソ系列指示詞と不定語を取り上げ、それぞれの用法を見ていく。さらに、特に中世の抄物資料において見られる指示語ソコと不定語イツコ・ドコの例を検討することにより、ソ系列指示詞と不定語との類似性を考察し、変化の要因を分析する。

ソ系列の用法には歴史的变化の中で一部、不定語との接点を持つ用法が確認できる。このソ系列から不定語への言語化の変化を考察するにあたり、中古・中世のソ系列指示詞と不定語を取り上げ、いつごろ、どのように生じたのかという検討を行った。その結果、中古から中世にかけて、ソ系列指示詞と不定語とが結びつく背景には、一次的な発話を二次的に再現する引用という場が関連していることが明らかになった。

現代語であれば、「どことなく」という語に対応する。同じように、「そこはかとなく」や「さりげなく」など現代語にも慣用的な表現として残ってはいるものの、「なんとなく」

「何気なく」など、不定語の表現に取って代わられている。より、空欄度の高い語として、ソ系列指示詞に代わり、不定語が選択されるようになったと考えられる。

しかしこの考察に対しては、議論も出ており、Hoji, Hajime 他(2000)の論考と合わせて検討していく必要のあることがわかっている。

### (4) 研究期間の最後に、報告書を作成した。

この報告書には、(1)～(3)までの研究成果とともに、これまで変化の過渡期とされているものの、資料の性格や分量からなかなか扱われてこなかった、中世期の抄物についてのデータを一部、資料として付した。このデータを作成する際に気づいた点についても報告書内に記載した。このデータ作成は、松本朋子氏の協力による。

### <引用文献>

庵功雄, くろしお出版, 日本語のテキストの結束性の研究, 2007

岡崎友子, ひつじ書房, 日本語指示詞の歴史的研究, 2010

Hoji, Hajime, Satoshi Kinsui, Yukinori Takubo and Ayumi Ueyama (2000),

Demonstratives, Bound Variables, and Reconstruction Effects. Proceedings of the Nanzan GLOW: The second GLOW meeting in Asia, September 19-22, 1999, Nanzan University, Nagoya, pp. 141-158

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

#### [雑誌論文](計2件)

藤本 真理子, そこはどこ 指示について, 尾道市立大学日本文学論叢, 査読無, 11巻, 2015, pp. 245-256

DOI: <http://dx.doi.org/10.18899/nic.11.13>

藤本 真理子, 聞き手領域に関わるア系列の指示 中世を中心に, 日本語文法史研究, 査読無, 3巻, 2016, 未定

#### [学会発表](計3件)

藤本 真理子・松本朋子, 指示語ソコと不定語イツコ・ドコについて 中古・中世を中心に, 土曜ことばの会, 2015年7月11日, 大阪大学

藤本真理子, ソ系列指示詞と不定語との関連 中古・中世を中心に, 日本言語学会, 2015年11月28日, 名古屋大学

藤本真理子, 古典語におけるソ系とア系の切り替わり 中古, 研究発表会「バリエーションの中での日本語史」シンポジウム, 2016年4月30日, 大阪大学

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

藤本 真理子 (FUJIMOTO, Mariko)  
尾道市立大学・芸術文化学部・講師  
研究者番号：10736276

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者

松本 朋子 (MATSUMOTO, Tomoko)